国内外来種ヤクシマザルの生息状況：口永良部島におけるカメラトラップ調査報告

藤田志歩[1]、杉浦秀樹[2]、半谷吾郎[3]、栗原洋介[4]、角田史也[5]、田中美衣[5]

1 鹿児島大学共通教育センター、 2 京都大学野生動物研究センター、3 京都大学生態学研究センター、
4 静岡大学農学部附属地域フィールド科学教育研究センター、5 京都大学大学院理学研究科

背景

屋久島の西方約12kmに位置する口永良部島は、薩南諸島最大の火山島で、島の成り立ちや動植物相は屋久島と大きく異なる。例えば、口永良部島にはエラブオオコウモリ（*Pteropus dasymallus dasymallus*）が生息しているが、一方、屋久島にはエラブオオコウモリは生息しておらず、同じ果実食者としてヤクシマザル（*Macaca fuscata fuscata yakui*）（以下、サル）が生息する。

2021年に、口永良部島において本来生息していないサルが目撃された。サルは1990年代に島に持ち込まれたことが分かっており、その後、捕獲によって消滅したと考えられていた。国内外来種であるサルは島の生態系に悪影響を及ぼすことが懸念される。

目的

口永良部島において、外来種ヤクシマザルの生息状況を明らかにする。

方法

1. カメラトラップ調査

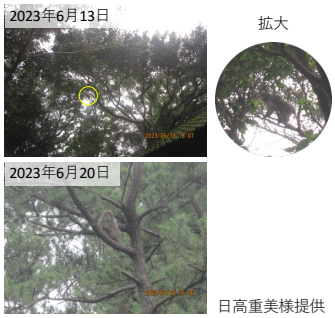
設置箇所： 島内計14箇所（右図）
使用機種： Bushnell XLT HD MAX
撮影条件： 静止画（2～3連写）
インターバル 3秒
撮影期間： 2022年11月～2023年10月（継続中）

2. 聞き取り調査

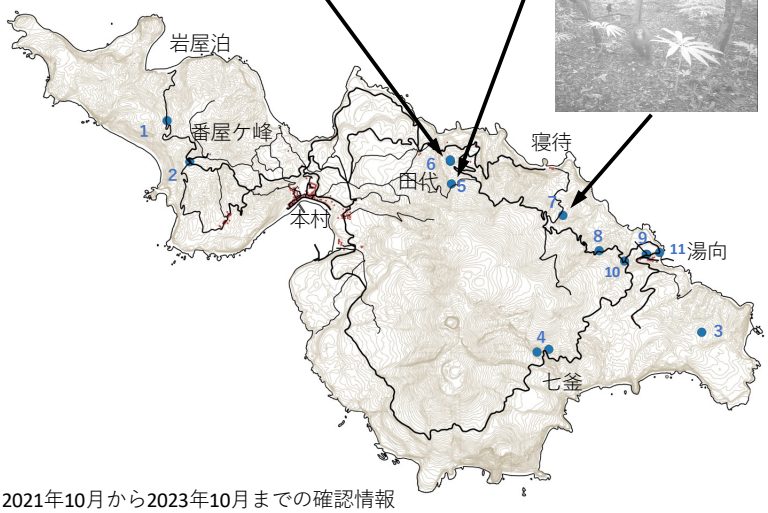
実施日： 2022年12月1～2日
2023年10月8～9日
対象者： サルの目撃者および関係者

自動撮影カメラおよび音声録音機設置場所
※ 2023年10月に音声録音機2機を追加設置

2021年以降のサルの目撃・撮影・捕獲地点



日高重美様提供



2021年10月から2023年10月までの確認情報
カメラトラップによる撮影回数：4回
目撃回数（捕獲を含む）：13回

1990～2010年代の経緯（聞き取り調査とアンケート調査による）

- 1997年5月、岩屋泊周辺でアカンボウを含む14頭を確認した（半谷、早川）。
- 岩屋泊で目撃されてから約半年後に湯向でも目撃された。
- 屋久島からサルが持ち込まれ、岩屋泊および湯向それぞれに放されたのではないか。
- 目撃直後、オオコウモリ保護の目的で県教育委員会によりサルの捕獲が行われた。岩屋泊と七釜に捕獲檻が設置され、多数捕獲された。
- 2012年頃までは島民にしばしばサルが目撃された。目撃されたサルはほとんどが単独であった（幅：1～7頭）。
- 2015年の口永良部島大噴火前後（2013年～2017年）にも3回の目撃があったが（いずれも単独）、それ以降は目撃されていなかった。

令和4年度環境省「エラブオオコウモリ保全業務報告書」（えらぶ年寄り組）によるアン ケート調査結果参照

地点	場所	日付	確認された個体	確認状況
1	岩屋泊方面	2021年10月27日	親子を含む3頭	観光客が目撃
2	番屋ケ峰西	2021年10月27日	親子連れ、他	観光客が目撃
3	湯向南	2022年1月28日	オトナオス１頭	鹿罠にかかる
4	七釜	2022年9月～10月上旬	1頭	工事関係者が目撃
4	七釜	2022年9月～10月上旬	1頭	工事関係者が目撃
5	田代	2023年5月21日	オトナオス１頭	自動撮影カメラで撮影
5	田代	2023年5月28日	オトナオス１頭	自動撮影カメラで撮影
6	田代	2023年6月13日	オトナオス１頭	住民が自宅周辺で目撃
7	寝待南	2023年6月15日	オトナオス１頭	自動撮影カメラで撮影
6	田代	2023年6月20日	オトナオス１頭	住民が自宅周辺で目撃
8	田代～湯向	2023年6月22日	１頭	住民が道路で目撃
9	湯向	2023年6月28日	１頭	住民が道路で目撃
10	湯向	2023年7月5日（?）	１頭	住民が目撃
10	湯向	2023年8月	１頭	住民が目撃
11	湯向	2023年8月	１頭	住民が目撃
9	湯向	2023年10月8日	１頭	地元出身者が道路で目撃
5	田代	2023年10月8日	オトナオス１頭	自動撮影カメラで撮影

まとめ

- 聞き取り調査から、サルは1990年代後半に島内２箇所（岩屋泊、湯向）に持ち込まれたと考えられる。2015年の大噴火以降、あらたにサルが持ち込まれたという情報はなかった。これらのことから、サルは島内に定着していると推測される。
- 島の西部（岩屋泊、番屋ケ峰）では親子が確認されていることから、繁殖群が生息していると考えられる。
- 島の東部（田代、湯向）で目撃された個体はいずれも１頭であり、約半数はオトナオスで、その他については性、年齢は不明であった。
- 群れ数は不明であるが、島の中央部に人口が集中する本村集落があることから、東部と西部それぞれに異なる群れが生息する可能性がある。しかし、東部で目撃されたサルはいずれも単独であったため、ハナレオスが群れの遊動域から離れて動いていた可能性もある。

謝辞：口永良部島における調査では、貴船森様、川東久志様、畠嘉人様、日高重美様、山口英昌様から貴重な情報をいただきました。Muhammad Nur Fitri Suhaimi 様には、データ分析においてお世話になりました。本研究は、一般社団法人日本霊長類学会保全・福祉活動助成および屋久島屋久島生物多様性保全研究活動奨励事業によって行われました。